

明恵撰『摧邪輪』卷中 訓・註 試稿(四)

米 澤 実江子

【抄録】

承前(『佛教大学 法然仏教学研究センター紀要』第一号・二号・三号)

キーワード：明恵・『摧邪輪』・訓読文・註記

【報告範囲】

「十七丁表五行目より二四丁表五行目」までを挙げ「試稿」とした。

【凡例】

- 一、底本は、佛教大学附属図書館蔵「寛永年間版(準貴重書 G極楽寺／377)」とし、始めに書き下し該当箇所を翻刻し、次に書き下しとその註記(通し番号)を挙げた。
- 一、翻刻にあたっては、底本の字体を残した。書き下しに際して、通行の字体に改めた。

一、翻刻部、【】の内、丁数とオ(ウ)を示す場合は、底本の丁数とその表(裏)を指し、漢数字と上(下)を示す場合は『鎌倉旧仏教』本刻部の頁とその上(下)を指す。

一、〈〉は原割り注。「」は割り注内の割り注。

一、訓読文において、返点・送り仮名は、原則底本に従ったが、送り仮名は適宜補った。

一、訓読文において、典籍引用部は改行して二文字下げた。また引用末の「云々(云云)」は、「」と云々(云云)」とした。

一、訓読文において、明恵の設問とその答えは、それぞれ改行した。

一、注記における引用出典の略称は以下の通りである。

『昭法全』(『昭和重修法然上人全集』)

『浄全』(『浄土宗全書』)

『大正蔵』(『大正新脩大蔵経』)

『望仏』(『望月佛教大辞典』増訂版)

『中仏』(中村元著『広説佛教語大辞典』)

『織田仏』（織田得能著『織田佛教大辞典』）

『大漢和』（諸橋轍次著『大漢和辞典』）

『日国』（『日本国語大辞典』第二版）

『漢和大辞典』（藤堂明保編『学研 漢和大辞典』）

〔付記〕

当研究班研究課題の底本として、佛教大学附属図書館所蔵本を使用させて頂きました。佛教大学図書館のご厚情に感謝申し上げます。

《翻刻》【十七丁オ五行】【三四六頁下】

外道闡提雖聞生謗墮於地獄、一熏耳識功、不唐捐終令獲益。乃至成佛、如狂罵藥服、必病除。【三四七頁上】如毒塗鼓聞者皆死。是故經云。譬如生盲不見日日光亦爲作饒益。令知時節。受飲食、永離衆患、身安穩、無信衆生不見佛而佛亦爲興義利。聞名及以觸光明。因此乃至證菩提等（云云）。此利益三世無【十七丁ウ】改易然汝令諸人廢退經道。甚以不可也。

《訓》

外道・闡提も、聞きて謗を生じて地獄に墮つと雖も、一たび耳識に薫する功、唐捐せず終に益を獲しむ。乃し成仏までに至る。狂じて罵りて藥を服するも、必ず、病、除くるがごとし。毒塗の鼓の、聞く者皆、死するがごとし。是の故に『經』に云はく。

譬へば、生盲の日を見ざれども、日光、亦た爲に饒益を作すがごとし。時節を知り、飲食を受け、永く衆患を離れて、身をして安

隱ならしむ。無信の衆生、仏を見ざれども、而も仏、亦た爲に義利を興す。名を聞き、及び光明に触るる。此れに因りて、乃至菩提を証す、等と（云云）。

此の利益は三世に改易無し。然るに汝、諸人をして經道を廢退せしむ。甚だ以て不可なり。

註

- (1) 「狂罵藥服必病除」、【参考】澄觀『行願品疏』（『卍新纂統藏經』五、四九頁中）。
- (2) 「毒塗鼓聞者皆死」、【参考】澄觀『行願品疏』（『卍新纂統藏經』五、四九頁中～下）。
- (3) 「饒益」、利益し救うこと・人々に利益を与えること（『中仏』下、一三〇七頁）。
- (4) 『華嚴經』（八十卷）（『大正藏』十、二六七頁下）。

《翻刻》

問。我以當機念佛爲先望遂順次往生。汝執過分聖道唯期結緣。誰謂。於佛法都無利益乎。唯今所論者、順次生出離生死不定也。汝列結緣。我全不諍無之也。如何。答。若許有結緣者、順次出離更非不定。若就人言不定者、淨土門亦可同。淨土門未必即身遂往生。汝等又未望即身得念佛三昧。若期順次利益者、諸教皆有此益。於淨土者、或欲往生十方佛刹者、是亦可任意樂。又雖不生淨土於生死中有無量大益。

《訓》

問ふ。我は当機⁽⁵⁾の念仏を以て先として、順次の往生を遂ぐることを望む。汝は過分の聖道を執して、唯だ結縁の益のみを期す。誰か謂ふ。「仏法において都て利益無し」とはや。唯だ今論ずる所は、順次生の出離生死の定・不定なり。汝、結縁の益を列ぬる。我、全く之れ無しと諍はざるなり。云何ぞ。

答ふ。若し「結縁の益有り」と許さば、順次の出離、更に不定に非じ。若し人に就きて不定を言へば、浄土門も亦た同ずべし。浄土門にも、未だ必ずしも即身に往生を遂げず。汝等、又、未だ即身に念仏三昧を得んとも望まず。若し順次利益を期せば、諸教に皆此の益有り。浄土においては、或は十方仏刹に往生せんと欲はば、是れも亦た意樂に任ずべし。又、浄土に生ぜずと雖も、生死の中において無量の大益有りと。

註

(5) 「当機」、仏の説法が衆生の素質に従って利益を与えること、またその対象となる衆生・修行者に接して、の意味（『中仏』下、一二三三頁）。

《翻刻》

且約^{クスルニ}華嚴宗^ニ出^{シテ}解^ノ行^ヲ益^ク云。於第二解^ノ行^ニ住^{シテ}世界性^{【十八丁オ】}等以上處^ノ得^ク白淨寶網轉輪王位^ヲ。得^テ普見^ノ肉眼^ヲ見^ル三十佛刹塵數^ノ世界海等^ヲ。

即是^{チレ}十地位也。值^{シテ}遇^マ無量塵數^ノ諸佛世尊^ニ、受^{シテ}持^マ無量阿僧祇^ノ深妙法藏^ヲ、與^ニ一切衆生^ノ爲^ニ大善知識^ヲ。即^チ如善財善知識^ノ是也。

《訓》

且く華嚴宗に約するに、解行の益を出して云はく。

第二、解行の生において、世界性⁽⁶⁾以上の処に住して白淨寶網轉輪王⁽⁷⁾の位を得。普見の肉眼を得て、十仏刹塵數の世界海等⁽⁸⁾を見る⁽⁹⁾と。

即ち是れ十地位なり。無量塵數の諸仏世尊に値遇して、無量阿僧祇の深妙法藏を受持して、一切衆生の与に大善知識とす。即ち、善財善知識のごとき、是れなり。

註

- (6) 「世界性」、浄土（『中仏』中、一〇〇二）。
- (7) 「白淨寶網轉輪王」、白くてきれいな宝の網の飾りを持つ金輪王・此の位は十地にして満心に相当する（『中仏』下、一四〇二頁）。
- (8) 「世界海」、衆生が住み仏法が行われる所（『中仏』中、一〇〇二頁）。
- (9) 法藏『華嚴五教章』（『大正藏』四五、四八九頁下）。

《翻刻》

問曰。此可^{ハシ}爲^ル上代勝事^ノ。於末代^ニ者、不^ス可^ラ有^ル此順次勝益^ノ。如何^ヲ。答。如前說^ニ判^{スルコトハ}。正像末三時^ヲ、約^{シテ}現身證行興廢^ノ說。順次解行^ノ益未^{ハノ}必^マ開^{スシモマケ}上代^ニ。唯可^ニ依^{タ、シ}見聞善根^ノ有^マ无^ニ。即如^チ前所^ニ出^ス地獄天子三重頓圓^ノ益等^{上ノ}。又如^キ前^{キニ}出海水劫火不能爲障宿成堅種^ノ三途聞^{【三四}

七頁下】教等、此等皆宗家盛談也。若有其根機者、雖為惡世、必發心。若發心者、必可有其果【十八丁ウ】也。不可依惡世惡趣。何況善趣乎。

《訓》

問ひて曰はく。此れは上代の勝事たるべし。末代においては、此の「順次の勝益」有るべからず。云何ぞ。

答ふ。前に説くがごとし。正・像・末の三時を判ずることは、現身証行の興廢に約して説く。「順次解行の益」は、未だ必ずしも上代に聞けず。唯だ見聞善根の有無に依るべし。即ち、前に出す所の「地獄天子三重頓円の益」等のごとし。又、前きに出す「海水劫火不能為障・宿成堅種三途聞教」等のごとし。此れら、皆、宗家の盛談なり。若し其の根機有らば、惡世たりと雖も必ず發心せん。若し發心せば、必ず其の果有るべきなり。惡世惡趣に依るべからず。如何に況や善趣をや。

註

- (10) 『摧邪輪』卷中、十七丁オ。
- (11) 『摧邪輪』卷中、十一丁オウ。
- (12) 【参考】澄觀『行願品疏』（『正新纂統藏經』五、四九頁中・六八頁上）。

《翻刻》

問。爾者、何故安樂集等中、云於末代「唯有淨土一門可通入一路

等乎。答。彼等就淨土門立一分理。若無此理者、淨土門有何益乎。彼文所引聖道一種今時難證等之言、亦約現生證道說之。即下文云。那含羅漢斷五下、除五上。無問道俗、未有其分等者、即此意也。更非蘭順生順後益也。彼中所引大集月藏經文亦同此意也。然祖師立宗為今人知。其道已興、處遺偏滯過。若取此捨彼。如惡水愛火。皆應機為妙藥。莫執一捨一二。

《訓》

問ふ。爾らば、何が故ぞ『安樂集』等の中に、

末代においては、唯だ淨土の一門のみ有りて通入すべき路なり等と云ふや。

答ふ。彼らは淨土門に就きて一分の理を立つ。若し此の理無くんば、淨土門、何の益か有るや。彼の文に言ふ所の「聖道一種今時難証」等の言も亦た「現生証道」に約して之れを説く。即ち下の文に云はく、那含・羅漢、五下を斷じ、五上を除く。道俗を問ふこと無く、未だ其の分有らず。

等とは、即ち此の意なり。更に、順生・順後の益を簡つに非ずなり。彼の中に引く所の『大集月藏經』の文も亦た同じく此の意なり。然るに、祖師、宗を立つことは、人をして道を知らしめんが為なり。其の道已に興りぬれば、劇ぎて偏滯の過を遣る。若し此れを取りて彼を捨つるは、水を惡みて火を愛するがごとし。皆、機に應じて妙藥たり。一を執して二を捨つること莫れ。

註

- (13) 『安樂集』(『大正藏』四七、十三頁下)。
 (14) 「那含」、「阿那含」の略・欲界の煩惱を滅ぼした聖者(『中仏』下、一二七六頁)。
 (15) 「五下」↓「五下分結」下方(欲界)に結びつける五つの束縛(欲貪・瞋恚・有身見・戒禁取見・疑・煩惱(『中仏』上、四七一頁)。
 (16) 「五上」↓「五上分結」五つの上位の束縛・「上」とは三界の内の上の二界である色界と無色界との衆生を束縛する五つの煩惱(色貪・無色貪・掉挙・慢・無明)(『中仏』上、四八六頁)。
 (17) 『安樂集』(『大正藏』四七、十三頁下)。
 (18) 「順生」↓【参考】「順生業(順生受業)」その報いを次に生まれ変わった世で受ける行為(『中仏』中、八二一頁)。
 (19) 「順後」、次の生存より以後の生存(『中仏』中、八二〇頁)。
 (20) 「彼の中」、『安樂集』(『大正藏』四七、十三頁下)。
 (21) 『大方等大集經』(『大正藏』十三、三六三頁上)中、二二六七頁上)。

《翻刻》

問。祖師設雖^{ヒト}不^ス偏執^セ、若有^シ一邊道理^ノ者、須^ク依^ル憑^ノ之^ヲ。時、属^{シテ}末代^ニ【十九丁オ】諸行皆陵遲^ス。設雖^{ヒト}黨^ニ餘行^ヲ可有^ル何益^ハ乎。答。淨土門祖師解釋、非^ス不^ス依^ル憑^ノ之^ヲ。皆以仰^テ信^ス之^ヲ。但破^シ此書^ヲ者、即爲^メ成^ル立^{セム}聖道淨土二門義^ヲ也。若成^シ立^セ善提心^ヲ者、二門佛道亦以可^シ光顯^ス。就^ニ中善提心^ト者、緣^{シテ}法滅^ヲ爲^ス發起因緣^ト。

《訓》

問ふ。祖師、設ひ偏執せずと雖も、若し一辺の道理有らば、須らく之を依憑すべし。時、末代に属して、諸行、皆、陵遲す。設ひ余行を

黨くと雖も、何の益か有るべきや。

答ふ。淨土門祖師の解釈、之を依憑せずに非ず。皆以て之を仰信す。但し、此の書を破すことは、即ち、聖道・淨土二門の義を成立せんが爲なり。若し善提心を成立せば、二門の仏道も亦た以て光顯すべし。中に就くに、善提心とは法滅を縁じて発起の因縁とす。

《翻刻》

如下十住毗婆娑論第二説^ニ發善提心七因縁^ヲ中云^ニ。一者諸如來令^{シム}發善提心^ヲ。二見^ニ法欲^ニ壞^ス守護^{スル}故發心^ス。三於衆生中^ニ大悲而發心等^ヲ云云。論長行釋第二因縁云^ク。或復有^ハ人生^{シテ}在惡世^ニ見^テ法欲^ニ壞^ス爲^ス守護^ス故發心^ス(廣文畧之)。又下文云^ク。如是三心必得^ニ成就^ス。根本深故^ニ云云。又起信論云^ク。或因^ハ正法欲^ニ滅^ス以下護法^ヲ因縁^ヲ能自發心^ス。又華嚴【十九丁ウ】中有^リ大王。見^テ法滅^ス發善提心^ヲ。依此力^ニ故^ニ於【三四八頁上】六十千歲中^ニ佛法得興盛^{ナルコトヲ}云云。如是經論説非^ニ。

《訓》

『十住毘婆沙論』の第三に「發善提心の七因縁」を説く中に云ふがごとし。

- 一は、諸如來、善提心を發さしむ。
 - 二、法の壞しなんと欲するを見て、守護するが故に心を發す。
 - 三、衆生中において、大悲をもて發心す、等と(云云)。
- 『論』の長行に、第二の因縁を釈して云はく。

或は、復た人有りて、惡世に生在して法の懷しなんと欲するを見て、守護の爲の故に發心す、と〔広文、之を略す〕。

又、下の文に云はく。

是のごとく、三心は必ず成就することを得。根本深きが故に、と〔云云〕。

又、『起信論』に云はく。

或は、正法滅しなんと欲するによりて、法を護る因縁を以て、能く自ら發心す、と。

又、『華嚴』の中に

大王有り。法の滅するを見て菩提心を發す。此の力に依るが故に、六十千歳の中において、仏法興盛なることを得、と〔云云〕。

是くのごときの『經』『論』の説、一に非ず。

註

- (22) 『十住毘婆沙論』(『大正藏』二二六、三五頁上〜中)。
- (23) 『十住毘婆沙論』(『大正藏』二二六、三五頁中)。
- (24) 『十住毘婆沙論』發心の七つの因縁の内の始の三つの因縁に説かれる發心「是七心中①仏觀其根本教令發心必得成以不空言故②若為尊重仏法為欲守護③若於衆生有大悲心如是三心必得成就」(『大正藏』二六、三六頁、上)。
- (25) 『十住毘婆沙論』(『大正藏』二二六、三六頁上)。
- (26) 『大乘起信論』(『大正藏』三三、五八〇頁中)。
- (27) 八十卷『華嚴經』(『大正藏』十、三八九頁上)。四十卷『華嚴經』(『大正藏』十、七六一頁下〜七六二頁上)。

《翻刻》

良^ニ以^ミ、無上佛法難^{クシテ}遇^ヒ一遇^{ヘリ}。如^シ盲龜得^ノ浮木^ヲ。滿界財寶不如^モ一句法^ニ。恒沙身命不比^ハ四句偈^ニ。若聞^ニ一字正法^ヲ、洞燃猛火之底未^モ必^シ厭^ハ之^ヲ。若無^{クハ}佛法名字、深禪欲樂之天不足^レ爲^ニ樂^ト。如^シ華嚴云^ニ。菩薩摩訶薩求^テ佛法藏^ヲ恭敬尊重^{シテ}生^ス難得^ノ想^ヲ。有^テ能說者^ニ來語^ニ之^ヲ。若能投^ケ身^ヲ七仞火坑^ニ、當^ニ施^ニ汝法^ヲ。菩薩聞已歡喜踊躍。作^ス是思惟^ヲ。我爲法^ノ故尚應^シ久住^{シテ}阿鼻獄等一切惡趣^ニ受^ケ無量苦^ヲ。何況、纔入^ニ人間火坑^ニ即得^ニ聞^{コトヲ}法^ヲ。奇^{ナヤ}哉^ナ。正法甚爲^{タス}易^{シト}得^エ。不^ス受^ケ地獄無量楚毒^ヲ。但^ハ二十丁オ^ニ入^テ火坑^ニ即^チ便得^レ聞^{コトヲ}。但爲^ニ我^ニ說^ケ。我入^ニ火坑^ニ。如^{キハ}求善法王菩薩金剛思惟菩薩^ニ爲^ニ求法^ヲ故入^ニ火坑中^ニ。〔云云〕。

《訓》

良に以んみれば、無上仏法、遇ひ難くして一たび遇へり。盲龜の浮木を得たるがごとし。滿界の財宝も一句の法には如かず。恒沙の身命も、四句の偈⁽²⁸⁾に比ばず。若し一字の正法を聞かば、洞然猛火の底も未だ必ずしも之を厭はず。若し仏法の名字無くんば、深禪欲樂の天も樂とするに足らず。『華嚴』に云ふがごとし。

菩薩摩訶薩、仏法藏を求めて、恭敬・尊重して難得の想を生ず。能說者有りて、來たりて之れに語りて曰はく。「若し能く身を七仞の火坑に投げば、當に汝に法を施すべし」と。菩薩、聞き已りて歡喜踊躍す。是の思惟を作す。我、法の爲の故に、尚し心に久しく阿鼻獄等の一切の惡趣に住して無量の苦を受くべし。何に況や、纔に人間の火坑に入りて、即ち法を聞くことを得るをや。奇かなや。正法、甚だ得易しとす。地獄の無量の楚毒⁽²⁹⁾を受けずして、

但だ火坑に入りて、即便ち聞くことを得んこと。但だ我が為に説け。我、火坑に入らん。求善法王菩薩の、金剛思惟菩薩のごときは、求法の為の故に火坑中に入る、と（云云）。

註

- (28) 「四句偈」、「諸惡莫作」「諸善奉行」「自淨其意」「是諸仏教」（『大般涅槃經』『大正藏』十二、四五一頁下）（『中仏』中、六三九頁）。
- (29) 「楚毒」、苦痛（『大漢和』六、四五九頁）。
- (30) 『八十卷華嚴經』（『大正藏』十、一四八頁下）。

《翻刻》

當^ニ知^ル。三惡極重苦尚爲^レ法不^レ爲^レ難。況^ヤ於^テ餘事^ニ乎。爲^メ四句^ノ而身^ニ受^ケ千釘^ヲ、求^テ半偈^ヲ而高巖捨^レ命^ヲ。王身爲^リ羅刹^ノ之床、天衣作^ス野干^ノ之坐。輕^メ天王^ノ之勝位^ヲ、敬^テ鬼畜^ヲ爲^ル尊高^ト者、莫^キ不^{コト}皆是重^レ法爲^セ先也。如^レ此大心行者、聞^カ法滅音^ヲ、幾許^ニ爲^レ患乎。於^テ發心中^ニ爲^ニ堅固因緣^ノ、良有^ニ所以^ハ乎。是故、佛法雖^モ迄^ニ滅時^ニ有^ニ發心人^ノ者、尚復繁興^{セム}。汝與^レ我共生^ニ在^{セリ}惡世^ニ。所^ハ見聞^ニ唯有法滅相^ヲ。緣^{シテ}此不^レ發心^セ。何其悲乎。設^ヒ汝雖^モ類^ニ木石^ニ、爲^ニ有^ニ心人^ノ莫^レ出^ス此不忍之言^ヲ矣。又設^ヒ雖^モ無^ニ十丁^ノウ^ト教法^ヲ見聞敬養益^ハ、是十門性起功德中第十^ノ性起功德也。

《訓》

当に知るべし。三惡極重の苦も、尚し法の為に難とせず。況んや、余事においてをや。

四句の為に身に千釘を受け、半偈^①を求めて高巖に命を捨つ。王身、羅刹の床となり、天衣を野干の坐と作す。天王の勝位を軽めて鬼畜を敬ひて尊高とするは、皆、是れ法を重くするを先とせざることに莫きなり。^②

此のごとくの苦心の行者、法滅の音を聞かんに、幾許か患へとせんや。發心の中において堅固の因縁たること、良に所以有るをや。是の故に、仏法、滅時に迄ぶと雖も、發心の人有らば、尚し復た繁興せん。汝と我と共に惡世に生在せり。見聞する所は唯だ法滅の相のみ有り。此を縁じて發心せざる。何ぞ其れ悲きや。設ひ、汝、木石に類すと雖も、有心の人の為に、是の不忍の言を出すこと莫れ。又、設ひ、教法無しと雖も、「見聞敬養^③の益」は是れ「十門性起^④の功德」の中の第十「性起^⑤の功德」なり。

註

- (31) 「半偈」、【仏教語】偈文の半分・「諸行無常・是生滅法・生滅滅已・寂滅爲樂」の下の八文字（『大般涅槃經』（『大正藏』十二、二〇四頁下）（『日国』十一、二三三頁）。
- (32) 法藏『梵網經菩薩戒本疏』（『大正藏』四十、六四四頁上）。
- (33) 「見聞敬養」、【参考】法藏『探玄記』「見聞恭敬供養得益」（『大正藏』三五、四〇六頁下）。
- (34) 「十門性起」、【参考】法藏『探玄記』（『大正藏』三五、四一八頁上）。
- (35) 「性起」、「本性現起」の意・縁起の究極的事態を指す華嚴教學の用語・ものの体性がそのまま現れていること・法性そのものの現れ（『中仏』中、八四〇頁）。↓「法性」諸法（諸存在・諸現象）の眞実なる本性・ありのままのさとの本性（『中仏』下、一五三五頁）。

《翻刻》

彼見聞境界種類無邊也。或供形像^ヲ、或敬遺跡^ヲ。其善皆無^シ非^ニ性起法門^ニ。然如來遺跡處處^ニ在^レ之。或盤石上千輪耀^シ光、或經行跡華文標^レ異。加之、五百塵點往劫行事、在^レ今炳然^{タリ}。薩埵捨^レ身流血尚存^{セリ}。達拏與^シ子杖捶留^ム跡。布髮掩^シ泥之所、捨^テ身求^レ偈之地、月光斬^リ首、尸毗飼^{ガフ}鷹^ニ。此等遺蹤弥^ニ綸^{セリ}於五天^ニ。外道凶人、有^ニ鑿^{ケル}刪^{コト}其文復^{カヘ}現^ス。若有^レ投^{コト}江河^ニ還來^ニ本處^ニ。水火不^ニ焚^セ漂^セ。風災不破^セ懷^セ。久留後代^ニ永爲^ク衆生歸仰^ニ。皆是如來隨染業幻自然大用也。若約^シ衆生^ニ爲^ス衆生緣感之功徳^ト。若約^シ衆生^ニ爲^ス衆生性起之大用^ト。

《訓》

彼の見聞境界の種類、無辺なり。或は形像を供し、或は遺跡を敬ふ。其の善、皆「性起の法門」に非ざることを無し。然るに、如來の遺跡、處處に之れ在り。或は盤石の上に千輪、光を耀やかし、或は經行の趾に、華文、異を標せり。しかのみならず、五百塵點、「往劫の行事、今に在りて炳然たり。薩埵の、身を捨てし流血、尚し存せり。達拏の子を與へし杖捶、趾を留む。髪を布きて泥に掩ひしの所、身を捨てて偈を求めしの地、月光、首を斬り、尸毘、鷹に飼ふ」。此れらの遺蹤、五天に弥綸せり。外道・凶人、鑿り刪ること有れば、其の文、複りて現ず。若し江河に投ずること有れば、還りて本処に來たる。水火も焚漂せず、風災も破壊せず。久しく後代に留まりて、永く衆生の帰仰たり。皆、是れ如來の「隨染業幻、自然の大用」なり。

若し衆生に約すれば、「衆生緣感の功徳」とす。若し如來に約すれば、「如來性起の大用」⁽⁴⁵⁾とす。

註

- (36) 「千輪」、↓「千輻輪」↓「千輻輪相」仏が具えている三十二相の特徴の一つで、足の裏にある紋（『中仏』中、一〇四七頁）。
- (37) 「五百塵點」釈尊成仏以來久遠なること、これを「五百塵點劫」あるいは「五百億塵點劫」と称する（『望仏』四、三六三四頁）。↓「塵點」、「塵點劫」の略↓「塵點劫」はかることのできない長い時間（『中仏』中、九六七頁）。
- (38) 「達拏（たつた）」↓「達嚩」布施・財施・「如來は一切衆生のため」に功徳の達嚩を説く・「施に報いる法を名づけて達嚩という」（『望仏』四、三四七四頁）。蒙古語・Tadaの別音・大珠の義（『大漢和』十一、一四一頁）。↓「大珠」大きなたま（『大漢和』三、四一〇頁）。
- (39) 「尸毘」↓「尸毘王」釈尊因位に菩薩行を修せられし時の名（『望仏』四、一九八〇頁）。【参考】『菩薩本行經』「仏言我為尸毘王時為一鵠故割其身肉興立誓願除去一切衆生危險摩訶薩埵太子時為餓虎故放捨身命」（『大正藏』三、一一九頁上）。
- (40) 『釈迦方志』「往劫行事薩埵捨身流血尚在達拏捨子杖捶遺血布髮掩泥之所捨身求偈之地月光斬首尸毘飼鷹斯等遺蹤並惟古劫計數災蕩如何尚在」（『大正藏』五一、九七三頁上）。【参考】『遺跡講式』に同文引用（『大正藏』八四、九〇三頁下）。
- (41) 「五天」↓「印度」半島の東南端に一群の海水を隔てて錫蘭島あり。中古その地方を分画して東西南北中の五区とした。これを「五天竺」「五印度」、略して「五天」「五竺」または「五印」と称せり（『望仏』一、一八六頁）。
- (42) 「焚漂」、「無量壽經」卷下「横為非常水火盜賊怨家債主。焚漂劫奪消散磨滅。憂毒怙怙無有解時」（『大正藏』十二、二七四頁下）参照。
- (43) 「隨染業幻自然大用」、法藏『大乘起信論義記』上（『大正藏』四四、二五一頁上）。
- (44) 「緣感」、緣（対象である衆生）が感ずる（信心がおこる）こと（『中仏』上、一三七頁）。

(45) 【参考】『遺跡講式』（『大正蔵』八四、九〇四頁上）。

《翻刻》

縁性無^ニ終同法界^ニ。無^ク作者、無^ク成者、法性隨縁甚深不思議應用也。是故、信^{スル}遺跡^ヲ之人得^ニ如來愛子名^ヲ。復有^リ見佛^ノ吉慶^一。又爲^{ハタリ}現世^ノ明燈^一。又号當來導師^ト。如^ニ寶積經^ニ云。我之所愛子、謂^ニ諸善比丘^ニ、見^テ佛所遊方、昔^{ムカ}曾安^シ止^{シタマヒシ}。趣^ニ經行宴坐地、若石及空閑^上、集^{リテ}已共咨嗟^{シテ}爲^メ之數^ニ。涕^{セム}泣^一。《乃至》時住^ニ道場中、最勝菩提地^ニ、同來共集會^ニ。當^ニ如^ニ理思惟^ス。世尊於^ニ是^ニ趣^ニ、成無上佛果^ヲ。《乃至》七日跏趺^{シテ}、坐諦觀^ス菩提樹^ヲ。《乃至》是等照^ス世燈^ヲ。《乃至》當^ニ成^ニ大覺尊^ト。《乃至》我^レ說^ニ誠實言^ヲ、安^ス慰^ス如^レ是輩^一。彼雖^レ不^レ見^レ佛^ヲ、而與^{シモト}見^ル佛同^ニ《已上》。邊地衆生、雖^{トモテ}行而不^レ見^ル、尚有^ニ【二一丁ウ】戀慕思^ノ者、即是爲^ニ如來愛子^一。

《訓》

縁性無^ニにして終に法界に同ず。作者無く、成者無く、法性隨縁甚深不思議の応用なり。是の故に、遺跡を信仰するの人は、如來愛子の名を得。復た見仏の吉慶有り。又は現世の明灯たり。又は、「当來の導師」と号す。『寶積經』に云ふがごとし。

我が所愛の子、諸善比丘に謂ひて、仏の所遊の方・昔曾安止したまひし処・經行宴坐の地・もしは石及び空閑を見て、集り已りて、共に咨嗟して、之れが為に數ば涕泣せん。《乃至》時に、道場の中、最勝菩提の地に往きて、同じく來たりて共に集会して、當に

理のごとく思惟すべし。世尊、是の処にして、無上仏果を成しとげり。《乃至》七日跏趺して、座して諦かに菩提樹を觀ず。《乃至》是れら、世を照す灯しび《乃至》當に大覺尊と成るべし。《乃至》我、誠実の言を説きて、是くのごときの輩を安慰す。彼は仏を見ずと雖も、而れども仏を見ると同じ、と《已上》。辺地の衆生、行きて見ずと雖も、尚し戀慕の思ひ有らば、即ち是れ、如來の愛子たり。

註

(46) 『大宝積經』（『大正蔵』一一、九頁中〜一〇頁上）。

《翻刻》

覺王、趣^{シテ}於中國^ニ。無^ル聖化於邊方^ニ。我^レ等爲^ニ如來愚子^一。何作^ニ過分思^ヲ乎。雖^{トモテ}於^ニ三藏教法^ニ論^中興^ニ廢不同^一、未^ダ云^ハ於^ニ此^ニ等大用^一無^ト益乎。如^キ彼^ノ三道寶階沒^シ地^ニ、龍窟^ノ眞影難^カ見者、寶階約^ニ一時化儀^ニ、眞影爲^ニ惡龍^ノ留^ム之^ヲ。未^ニ必^ス爲^ニ通相方便^一。機根有^ニ兼正^ニ化儀有^ニ隱顯^一。莫^ニ以^テ之例^ヲ餘耳。此^レ等、豈非^ニ菩提心勝緣^ニ乎。汝、旃^ニ於^ニ末世^ニ立^ル菩提【三四九頁上】心無縁義^一。無^キ情之至不可說不可說也。

《訓》

覺王、中國に処して聖化を辺方に垂る。我ら如來の愚子たり。何ぞ過分の思ひを作さんや。三藏教法において、興廢の不同を論ずと雖も、未だ此らの大用において益無しとは云はざるをや。彼の三道宝階⁽⁴⁸⁾、地

に没し、竜窟の真影⁽⁴⁹⁾、見難きがごときは、宝階は一時の化儀に約し、真影は、悪龍の為に之を留む⁽⁵⁰⁾。未だ必ずしも、通相の方便たらず。機根に兼正有れば化儀に隠顕有り。之れを以て余を例すること莫かれのみ。此ら、豈に菩提心の勝縁に非ざらんや。汝、強ちに末世に菩提心無縁の義を立つる。情無きの至り、不可説不可説なり。

註

(47) 「過分」、【参考】『東大寺十問答』「念仏は主、妄念は客人也。されはとて心の妄念をゆるされたるは、過分の恩也」(『昭法全』六四四頁)。

(48) 「三道」、見道(聖者の仲間に入った位)・修道(見道の次で、四諦を観察することを繰り返す段階)・無学道(阿羅漢の境地)(『中仏』上、五九九頁)。

(49) 【参考】『釈迦譜』「釈迦留影在石室記第二十六」(『大正蔵』五〇、六七頁下〜七〇頁上)。

(50) 【参考】『遺跡講式』(『大正蔵』八四、九〇三頁中〜下)。

(51) 「兼正」、「兼」三乗の人に通じ他教え・「正」三乗の人それぞれに相応した教え。【参考】法宝『俱舍論疏』(『大正蔵』四一、四五七頁上〜中)。

《翻刻》

又汝、勤^チ菩提心^テ經滅時^ノ殊撥^ニ菩提心^ヲ。見^ニ出生菩提心^ノ經所說^ヲ汝之言^ハ殊難^ニ忍^ヒ。如^シ彼經說^ニ。比丘、樂^{ハム}蘭若^ニ、手得^ニ此經典^ヲ。於^テ後常現前^ニ。比丘、聞此經^ヲ悲泣^{シテ}而雨淚^{ラム}。【二二丁オ】我、先作^ニ何業^ヲ今世得^ニ

此利^ノ。我、於^テ如是經^ニ未^レ曾善思^ハ惟^セ。我、已得^ニ授記^ヲ。何業^{ナル}獲^{タル}此果^ニ。《文》。此中、我已得授記者、上文授記云。所聞^ニ此經者、今現在我前^ニ、彼等於^ニ後世^ニ、此經當^ニ現前^ニ《文》。解曰。佛智、知^ニ三際無障導^ニ。悉皆如^ニ現在^ニ。於^テ如來滅後^ニ樂^ニ欲^ニ此經^ヲ人、無導智前^ニ現在佛前^ニ。此經、於滅後^ニ亦當^ニ現^ニ前^ニ於彼人前^ニ。

《訓》

又汝、『菩提心經』の滅時を勤みて殊に菩提心を撥す。『出生菩提心經』の所説を見るに、汝が言、殊に忍び難し。彼の『經』に説くがごとし。

比丘、蘭若を樂はんに、手に此の經典を得ん。後において常に現前せん。比丘、此の經を聞きて、悲泣して涙を雨らん。我、先に何なる業を作してか、今世に此の利を得たる。我、是くのごときの經において、未だ曾て善く思惟せず。我、已に授記を得たり。何なる業ありてか、此の果を獲たるといはん、と《文》。

此の中に「我已得受記」とは、上の文に授記して云はく。

此の經を聞かん所の者、今現に我が前に在り。彼れら、後世において、此の經、當に現前すべし、と《文》。

解して云はく。仏智、三際を知るに障導無し。悉く皆現在のごとし。如來滅後において此の經を樂欲せん人、無導智の前に現に仏前に在り。此の『經』、滅後においても亦た、當に彼の人の前に現前すべし。

註

(52) 『出生菩提心經』(『大正蔵』十七、八九五頁上)。

(53) 『出生菩提心經』（『大正藏』十七、八九五頁上）。

《翻刻》

此上文又說。得聞此經者、到六度彼岸。此經典、於如來滅後入彼人之手。即經云。說此修多羅令發大菩提。上文云。道於道無有差別。已上。若有差別者、雖不起菩提心、可有成佛人。無此理故、成佛法必須發菩提心。經說此無二菩提心爲一道故、聞說此經發菩提心也。

《訓》

此の上の文に又説く。

此の經を聞くことを得ん者、六度の彼岸に到らん。此の經典、如来滅後において彼の人の手に入らん。

即ち、『經』に云はく。

此の修多羅を説きて、大菩提を發さしむ（上の文に云はく。道、道において差別有ることなし、と〔已上〕。若し差別有らば、菩提心を起さずと雖も成仏する人有るべし。此の理無きが故に、成仏の法は必ず須らく菩提心を發すべし。『經』に此の無二の菩提心を説きて一道とするが故に、此の經を説くを聞きて菩提心を發すなり）。

註

(54) 『出生菩提心經』（『大正藏』十七、八九四頁下（取意））。

(55) 『出生菩提心經』（『大正藏』十七、八九四頁中）。

(56) 『出生菩提心經』（『大正藏』十七、八九三頁下）。

《翻刻》

梵志（拍迦葉婆羅門）、佛菩提未曾有三分別（菩提無相故也）。說【二二丁ウ】此修多羅令發大菩提（准上可知）。能斷一切疑。隨順衆生問（衆生、不知上無二道義。是故有一切疑。今、說一道義令斷之也。是故、此一道、隨順迷執衆生說也。乃至）、得聞此經者、彼、於未來世能行大布施至於檀彼岸（既發一道心故、須修一道行。其一道行究竟有布施等六度彼岸。依聞此經、皆究竟之也。已下五度經文、畧之）。

《訓》

梵志（迦葉婆羅門を指す）、仏菩提は未だ曾て分別有らず（菩提無相の故なり）。此の修多羅を説きて大菩提を發さしむ（上に准じて知るべし）。能く一切の疑を斷ず。衆生の問ひに隨順す（衆生、上の無二道の義を知らず。是の故に、一切の疑有り。今、一道の義を説きて之れを斷ぜしむるなり。是の故に、此の一道は迷執の衆生に隨順して説くなり。乃至）此の經を聞くことを得ん者、彼、未來世において能く大布施を行じて檀彼岸に至らん（既に一道の心を發すが故に、須らく一道の行を修すべし。其の一道の行、究竟するに、布施等の六度の彼岸有り。此の經を聞くに依りて、皆、之を究竟するなり。已下の五度の經文、之を略す）。

註

(57) 「究竟」、無上の・到達する・菩薩の極位を極める（『中仏』上、三二四頁）。

《翻刻》

已^(マ)曾^(ニ)作^(ス)供養^(ヲ)。上^(ニ)供^(ス)諸佛^(ニ)。憐^(コト)愍^(ス)衆生^(ヲ)者^(ナリ)。下^(ニ)愍^(ス)衆生^(ヲ)。得^(テ)聞^(コト)此經典^(ヲ)。後^(ニ)世^(ニ)到^(リ)其手^(ニ)。此大人^(ノ)、於^(ニ)如來滅後^(ニ)愛^(ス)敬^(ス)此經典^(ヲ)也。比丘^(ノ)、住^(シテ)蘭若^(ニ)意欲^(ニ)佛菩提^(ヲ)。六塵喧雜^(ヲ)愛^(ス)寂靜^(ヲ)練若^(ヲ)欲^(ス)樂^(スル)無上菩提^(ヲ)也。得^(レ)聞^(コト)此經^(ヲ)者、於^(ニ)後最先得^(ニ)依^(ニ)聞^(コト)信^(スル)此經^(ヲ)、於滅後^(ニ)最先得^(ニ)佛菩提^(ヲ)也。過去數億佛、已^(マ)持^(ス)此經典^(ヲ)。如^(レ)文可^(レ)知^(ス)。爲^(テ)利諸菩薩^(ヲ)發^(ス)起^(スル)意欲^(ヲ)故^(ニ)聞^(コト)此經^(ヲ)一道義^(ヲ)欲^(ス)樂菩提^(ヲ)故^(ニ)若有^(ニ)婆羅門^(ノ)欲^(ス)樂^(スル)佛菩提^(ヲ)、彼時得^(レ)信^(スル)已^(マ)是經^(ヲ)至^(ニ)其手^(ニ)。愚人難^(ハシ)信^(スル)【二三丁オ】欲^(シ)此經^(ヲ)有^(ル)欲樂^(ハ)者是智人^(ナルカニ)故出^(ス)沙門婆羅門^(ノ)二人^(ヲ)。理實攝^(ル)一切信樂人^(ヲ)也。是故下文出女人^(ヲ)。彼人^(ノ)、聞^(テ)此經^(ヲ)生^(セム)信欲^(ヲ)。此經^(ヲ)、至其人手^(ニ)住也。

《訓》

已に曾て供養を作す（上、諸佛に供す）。衆生を憐愍する者なり（下、衆生を愍れむ）。此の經典を聞くことを得て、後世に其の手に到らん（此の大人、如來滅後において、此の經典を愛敬するなり）。比丘、蘭若に住して、意に仏菩提を欲せん（六塵の喧雜を厭ひ、寂靜の練若を愛して、無上菩提を欲樂するなり）。此の經を聞くことを得ては、後において最先に得ん（此の『經』を聞

信するに依りて、滅後において最先に仏菩提を得るなり）。過去數億の仏、已に此の經典を持す（文の如く知るべし）。諸菩薩を利し、意欲を發起せんが爲の故に（此の『經』の一道の義を聞き、菩提を欲樂するが故なり）。若し婆羅門有りて、仏菩提を欲樂せんもの、彼の時に信ずることを得已りて、是の經、其の手に至らん（愚人は此の『經』を信欲し難し。欲樂有る者は、是れ智人なるが故に、沙門・婆羅門の二人を出す。理實、一切の信樂の人を撰するなり。是の故に、下の文に女人を出す。彼の人、此の『經』を聞きて信欲を生ぜん。此の『經』、其の人の手に至りて住するなり）。

註

(58) 「下文」、【参考】『出生菩提心經』（『大正藏』十七、八九五頁上）。

《翻刻》

我（佛也）、見^(ル)彼衆生^(ヲ)（佛眼、見^(ル)於滅後信欲此經^(ニ)衆生形^(上)也）。悉知^(ル)彼所行^(ヲ)（佛智、知^(ル)信^(スル)樂^(スル)此經^(ヲ)衆生受持讀誦等所行^(上)也）。亦知^(ル)彼名字^(ヲ)（佛智、知^(ル)信樂^(スル)此經^(ヲ)衆生名字^(上)也）。我見^(ル)悉無尋^(ナリ)（結上文也。舉眼見^(テ)攝智照^(ヲ)也）。一切願具說^(ニ)（信欲^(スル)此經^(ヲ)衆生、欲^(シ)佛菩提^(ヲ)修^(スル)六度行^(ヲ)大願等也。此又結^(ス)上文^(ヲ)也。於二句中^(ニ)上句結^(ス)我見彼衆生等三句^(ヲ)、下句惣結^(ス)上文^(ヲ)也）。恐迷^(セラム)（左訓「アハテ」「マトフラム」）未來人、懼^(レ)彼起^(スル)諸過^(ヲ)（如來、懼^(ル)滅後愚人迷^(テ)此經^(ヲ)一道義^(ニ)作^(コト)

異見過^ヲ、即如下^キ汝等捨^{カテ}菩提心^ヲ立^ニ別念佛心^ヲ等上^ハ者、是即失^ニ此經所說^ノ一道義^ニ也、是故少分說^ク重惣結^{スル}上諸義^ヲ也。解曰。汝、非^ス唯不^ニ愛樂此經^ヲ。反失^{テセリ}無二^ニ一道義^ヲ。然者、終不^ニ可^レ到^ル六度彼岸^ニ。二轉妙^ニ果期^{セム}何時^ノ乎。可^レ悲可^レ悲矣。

《訓》

我（仏なり）、彼の衆生を見る（仏眼、滅後に此の經を信欲する衆生の形を見るなり）。悉く彼の所行を知る（仏智、此の『經』を信樂せるの衆生、受持読誦等の所行を知るなり）。亦た彼の名字を知る（仏智、此の『經』を信樂する衆生の名字を知るなり）。我、見ること悉く無碍なり（上の文を結するなり。眼見を挙げて智照を撰するなり）。一切の願、具さに説く（此の『經』を信欲する衆生、仏菩提を欲し、六度の行を修する大願等なり。此れ又上の文を結するなり。二句の中において、上の句は「我、彼の衆生を見る」等の三句を結し、下の句は、惣じて上の文を結するなり）。恐迷せらん未來の人、彼は諸過を起すことを懼れて（如来滅後の愚人、此の『經』の一道の義に迷ひて、異見の過を作すことを懼る。即ち、汝らが菩提心を捨てて、別の念仏心を立つる等のごときは、是れ即ち此の『經』の所説の一道の義を失するなり）。是の故に少分に説く（重ねて惣じて上の諸義を結するなり）。解して云はく。汝、唯だ此の『經』を愛敬せざるのみに非ず。反りて無二一道の義を失せり。然らば、終に六度の彼岸に到るべからず。二轉の妙果、何れの時をか期せんや。悲しむべし、悲しむべし。

註

- (59) 『出生菩提心經』（『大正藏』十七、八九四頁中下）。
(60) 「二轉」、煩惱障と所知障とを転じてこの上なきさとりを得ること（『中仏』下、一二九八頁）。↓「煩惱障」煩惱というさとりを得るための障害（『中仏』下、一五五四頁）。「所知障」、知らるべき物に対する妨げ（『中仏』中、九二三頁）。

《翻刻》

經又云。彼等（指^ス上^ノ樂^ニ欲^{スル}此^ノ經^ノ人^ヲ也）住^{セハ}此^ノ智^ニ（愚人難^{ハシ}生^ニ樂^ニ欲^{スル}也）、爲^ニ誰^ノ之^ノ所^ノ説^ノ（一切世間中無^シ如^ニ佛世尊^ノ知^ル彼人所行名字^ヲ一人^ト也）、爲^ニ誰^ノ之^ノ所^ノ説^ノ（一切世間中無^シ如^ニ佛世尊^ノ知^ル彼人所行名字^ヲ一人^ト也）。若^シ我不^レ説^ス者、爲^ニ誰^ノ人^ノ所^ノ記^ス乎。已^マ知^ル彼心行^ヲ（世尊、正知^{ケル}於^ニ滅後樂^ニ欲^{スル}此^ノ經^ノ人^ノ心行^ヲ也）。

我今當^ニ記^ス彼^ヲ（任^テ佛智^ノ所知^ニ當^ニ授^ス記^ス。上文既云^ニ佛知^ル樂^ニ欲^{スル}人所行名字^ヲ。此一行文結彼前文^ニ生^{スル}後記^ス別文^ニ也）。

《訓》

『經』に、又云はく。

彼ら（上の、此の『經』を樂欲する人を指すなり）、此の智に住せん（愚人は樂欲を生じ難し。樂欲を生ずる人は、即ち是れ智人なるが故なり。此の智とは、即ち此の一道を知る智なり）。誰が為にか説かれんや（一切世間の中に、仏世尊の如く、彼の人の所行名字を知る人無し。若し我、説かずんば、誰人の為にか記されんや）。已に彼の心行を知る（世尊、正しく滅後において此の『經』

を樂欲する人の心行を知るなり。我、今、当に彼を記すべし
 〈仏智の所智に任せて、当に授記すべし。上の文に既に「佛、樂
 欲の人の所行名字を知る」と云ふ。此の一行の文は、彼の前の文
 を結して、後の記別の文を生ずるなり〉。

註

(61) 『出生菩提心經』、『大正藏』十七、八九四頁下)。

《翻刻》

即卽尊正授記別云。

所聞此經者、今現在我前。彼等、於後世此經當現前。〈如上解
 可。知〉。若有諸女人、抄寫此經典。此經當在。手。能生大菩提。
 〈若有生信樂女人者、即此經典之主也。如女人等一切准知〉。
 我於先已說。〈指上文也〉。比丘樂。蘭若。〈簡有邪求過人
 也〉、手得此經典、於後常現前。〈此經典、於女來滅後至無邪
 求過之比丘手上常可現前也〉。比丘聞此經、悲泣而雨淚。〈此記前
 練若比丘耽嗜此經之形也。此即身業也〉。我先作何業。〈自此
 下六句正記。比丘歡喜之語也。此下文可通語意。具【二四丁オ】
 有三業。可。知。之。即今世遇此大利。必依宿善也〉。今世得此
 利。〈此經所說菩提一切智因。故云利也。如經上文具說〉。我於如
 是經、未曾善思惟。〈大喜、徹骨作希奇思也〉。我已得授記。
 〈指上今現在我前等文也〉。何業。獲此果。〈前練若比丘、雖

恨重障之身生滅後、得此經典而感涙難禁。非唯所行名字開
 如來知見。重障之身亦現在佛前。是雖爲如來神力之所爲、定亦可
 有我善業。多句經文、惣記比丘歡喜踊躍之行相也〉。

《訓》

即ち、世尊、正しく記別を授けて云はく。

此の經を聞かん所の者、今現に我が前に在り。彼ら、後世におい
 て、此の經、當に現前すべし。上の如く解して知るべし。若し、
 諸ろの女人有りて、此の經典を抄写せん。此の經典、當に手に在
 るべし。能く大菩提を生ぜん。若し信樂を生ずる女人有るは、即
 ち此の經典の主なり。女人らの如く、一切准知せよ。我、先に
 已に説く。上の文を指すなり。比丘、蘭若を樂はんもの。邪求
 の過有る人を簡ぶなり。手に此の經典を得て、後において常に
 現前すべし。〈此の經典、女來滅後において、邪求の過無きの比丘
 の手に至りて、常に現前すべきなり〉。比丘、此の『經』を聞きて、
 悲泣して涙を雨して。〈此れは、前の練若の比丘、此の『經』を耽
 嗜するの形を記するなり。此れ即ち「身業」なり〉。我、先に何
 なる業を作してか。〈此れより下の六句は、正しく比丘歡喜の語を
 記するなり。此の下の文は、「語」・「意」に通ずべし。具さに
 「三業」有り。之を知るべし。即ち今世に此の大利に遇ふ。必ず
 宿善によるなり。今世に此の利を得たる。〈此の『經』所説の菩提
 心、一切智の因なるが故に「利」と云ふなり。『經』の上の文、
 具さに説くがごとし〉。我、是のごとくの經において、未だ曾て
 善く思惟せず。〈大喜、骨に徹して、希奇の思ひを作すなり〉。我、

已に授記を得たり（上の「今現在我前」等の文を指すなり）。何なる業ありてか、此の果を獲る、と云はん^⑧（前の練若の比丘、重障の身、滅後に生ずることを恨むと雖も、此の經典を得て、感涙禁じ難し。唯だ所行名字のみ、如来の知見に関かるに非ず。重障の身も亦た現に仏前に在り。是れ如来神力の所為たりと雖も、定んで亦た我が善業有るべし。多句の經文、惣じて、比丘歡喜踊躍の行相を記すなり）。

註

（62）『出生菩提心經』（『大正藏』十七、八九五頁上）。

（よねざわ みえこ）嘱託研究員、浄土宗総合研究所嘱託研究員